

新生「芦高」をめざして

前学校長(第19代) 齋藤 興哉

創立60周年、おめでとうございます。

「芦高60周年」という言葉は、私が大学を卒業して赴任したのは芦高がまだ25年にもなっていない時だったと、実感的に教えてくれました。その芦高は、かつての私にとって、すでに独自の風格を備えた、見事にできあがった存在でした。

60周年。おそらく歴史として見た場合、決して長いとは言えない年月でしょう。しかし、その歴史が実に起伏に富んだ歩みであったことは、『芦高五十年史』をひもとくまでもなく分かります。芦高の歴史は度重なる移転から始まりますが、最近の10年は、言うまでもなく阪神・淡路大震災とそれからの復興でした。

私が校長として赴任した平成10年には、中・南館の新校舎は竣工し、グラウンドの整備も終わっていました。市内の各地には、まだ震災の爪あとが更地という形で残っていましたが、学校は、本格的に教育内容の充実を図るという課題に取り組まなければならない時期にきていました。

折しも、生徒急減が続くなかで、全日制高校に係る長期構想検討委員会から報告書が出され、県の教育改革は拍車がかかりました。各学校は否応なく自らの将来像を描き、それを実現させていく努力を求められています。私は、自治と自由の校風を堅持し、部活動や自治会活動の活発な「元気のある」学校が芦高の目指す方向だと考えます。同時に、地域に開かれた学校として、地域の評価と支援をバックに進まなければなりません。その意味で、PTA対象の学校見学会の実施や県事業であるオープン・ハイスクールへの積極的な取り組みは評価できると思っています。

芦高のますますの発展を祈念しています。